

# 小学生が主体的・協働的に学ぶ授業づくり

——社会科の授業を通じて——

Creating the lesson that elementary school student learns to proactive and corporative:  
Through the lesson of social studies.

伊藤 陽一  
ITOH Yohichi

## I はじめに

書店に立ち寄り、教育関係図書コーナーに目をやれば、「アクティブ・ラーニング」「ユニバーサルデザイン」という言葉が、とにかく目に入ってくる。特に「アクティブ・ラーニング」は、教育委員会主催の研修会でも、必ずといっていいほど、挨拶の中で繰り返しアピールされている。

「アクティブ・ラーニング」とは、「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」のことである<sup>1)</sup>。今、その「学び」を、重要視する理由は何であろうか<sup>2)</sup>。

一つ目の理由は、教える側の一方的な教え込みの「学び」では、どの子ども達にも学ぶ意欲や知的好奇心が育つことはなく、何より受け身的で指示待ちの子ども達になる。そうした子ども達の姿からは、発展的で豊かな教育的成果が期待できないということが考えられる。

もう一つの理由は、これからの時代は、今まで以上に予測不可能な時代となり、何が正解か分からない問題に直面する。その解決のためには、専門的な知識と汎用能力を身に付け、他者（チーム）と協働作業を繰り返すこととなる。そこには、当然、豊かな表現力と協調性が求められる。

しかし、この「学び」については、何も今始まったことでもなく目新しいことでもない多くの小学校教員は思っている。しかも、「アクティブ・ラーニング」が「問題解決的な学習・探究活動の充実」「言語活動の充実」と相互に繋がっていることも、ある程度認知している。

にも拘らず、それらの言葉（理念）に見合うような授業実践（教育活動）が、果たしてどれだけ日々の教室や学校を満たしているのだろうか。現

実は、厳しいと言わざるを得ない。研究授業でさえ、「子ども達が主体的に学ぶ姿」に出会うことは、極めて稀なのである。

一方、学校現場では、日々「不登校児童」の対応や「いじめ」「虐待」「薬物乱用」等の課題と向き合い、その度保護者対応に追われ、多大な時間とエネルギーを費やす中、行事準備・教材研究に追われているということも周知の事実である。

以上のことを踏まえながら、「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」を保障する授業をどのようにデザインし、どのような具体的方法（手立て）を示してしていけばよいか。子ども達に問題解決能力や批判的な思考力、コミュニケーション能力など、汎用的な能力を身につけるためには、どのように校内研究を推進し授業実践を積み重ねていけばよいのか。

本稿では、「小学校社会科」の授業実践を通して、「授業デザインの理論と方法」について考察する。

## II 社会科について

### 1 社会科は何を学ぶ教科なのか。

それは、次の2つのことが挙げられる<sup>3)</sup>。

#### (1) 社会生活の理解

- ①自然環境・社会環境と人々の生活との関連
- ②現代社会の仕組みや働きと人々の生活との関連
- ③歴史や伝統文化と、先人の働きや人々の生活との関連

#### (2) 社会的事象についてのよりよい判断

- ①社会的事象の意味の多面的（多角的）な考察
- ②社会に見られる課題と自分達の生活との関わり

の把握、解決に向けて自分たちにできることの  
選択・判断

つまり、確かな社会認識を理解し、事実や事象から社会的意味を考え、社会の一員としてよりよい社会の実現のために自分ができるとは何かを考える教科であるといえる。

## 2 社会科はどのように学ぶ教科なのか。

それは、「児童が学習問題をつかみ、解決の見通しをもって深く考え学び合い、追究結果を振り返る」という問題解決的に学習する教科であるといえる<sup>4)</sup>。文部科学省教科調査官の澤井氏のまとめに従い、より具体的に社会科学習の特性と社会科学習を通して目指す子どもモデルを示すと、以下のようになる。

### (1) 社会科学習の特性

- ①「問い」をつかみ、その解決の見通しをもつことができる。
- ②深く考える
  - ・問題解決を見通して、調べる内容や方法の自己調整を図ったり追究結果を振り返ったりする。
  - ・事実と根拠を基にして結論に向けた理由付けを行い、説明できる。
  - ・社会的事象の特色や相互の関連などについて習得した概念を活用して、説明できる。
  - ・様々な情報を比較したり関連したりして、社会的事象の特徴、働き、因果関係、条件などを多面的・総合的に捉え、再構成して多様に表現できる。
  - ・社会に見られる課題等について、自分の意見を表明したり立場を明確にして議論したりできる。
- ③協働的に学ぶ
  - ・おもいや考えと違う相手とも対話できる。
  - ・言語活動の充実を図ることができる。
  - ・実社会の人とふれあい、学びとることができる。
- ④追究結果を振り返る
  - ・学習したことを振り返り、様々な情報を総合して、社会的意味を考え、表現することができる。
  - ・学習成果や自分の成長を自覚できる。

### (2) 社会科学習で目指す子どもモデル

- ①身の回りの様子や社会的事象を見つめ、自ら問いやめあてを設定できる子
- ②主体的に友達と協働して調べ、共に考える子
- ③人と対話し、自らのおもいや考えを深め、表現し、社会へ貢献できる子

このように社会科では、子ども達が「問い」をつかみ、解決の見通しをもって協働して深く考え学び合い、追究結果を振り返る活動を通して、社会的事象の意味を理解し、よりよい社会の実現に向けて参画する資質（公民的資質）や能力を身に付ける子の育成を目指すものと考えられる。

## 3 校内研究において、どのように研究仮説を立て、研究の重点を設定し研究を進めていけばよいか。

以下、一つのモデルを提示したい。

### (1) 校内における研究仮説例

社会科学習におけるキーワードを、「問い」と「協働」と捉え、その連動によって上記の目指す子どもモデルにある「主体性」や「協働性」といった態度や能力を形成していけるものとする。

例えば、「深草・伏見・京都」といった特色ある地域から教材化を図り、又、日本や世界で起こっていた（いる）歴史的事実や社会的事象と地域・自分自身と結びつける中で、「社会的な見方や考え方」を育てていくことが考えられる。

そこで、研究仮説として、

- ①子ども達にとって身近で切実な事実・事象や魅力ある人物と出会うことができれば、子ども達自らが「疑問」を持ち、「問い」を設定できるだろう。
- ②子ども達一人一人に、「調べる」ための学習方法を身に付けさせれば、子ども達自らが主体的に「問題解決」に向かうだろう。
- ③子ども達同士が、対話し協働することによって言語活動が充実すれば、学びの質が高まり考える力が育つだろう。

### (2) 研究の重点例

そして、校内研究の重点として、以下の4つの

視点が考えられる。

- ①魅力的な地域教材や教材の開発
- ②「問い」を意識した単元構想の展開と人の願いやおもいに迫る学習活動の工夫
- ③主体的な「調べ学習」のための個に応じた資料の作成と活用
- ④対話力や協働思考に向かうための言語活動の充実

これら4つの重点から、自校の実態に合わせて複数選択することが望ましいと考える。

#### 4 実際どのような社会科授業が日常的に繰り返されているのだろうか。

以下、文部科学省教科調査官の澤井氏の例を参考にしながら、代表的な例を4つ示したい<sup>5)</sup>。

##### ①「国語的教科書読み取り型授業」

教科書や資料をただ読み、一つ一つの文言に説明や思い付きの質問を繰り返し、まとめあげていく授業のことである。社会科を古い国語科に陥れる授業で、ノートに板書を書き写して終わりとなる。大変よく見かける。

##### ②「えせ問題解決的学習型授業」

一見、子どもからの「問い」を拾いあげているようだが、子どもから出された意見のうち、教師にとって都合の良い意見だけを取り出して、まとめてしまう授業のことである。「どんなことでも

いいから、発表してね。」と促しておきながら、結局は教師にとっての正解ばかり採りあげる授業であり、教師にしてみれば、「良い発言」を拾っているつもりでいるが、その「良い発言」は、教師の意図を先読みした発言（「先生は、こんなことを発表して欲しいのだろうか。」）かも知れない。

発表者が限定され、教室が不公平感と諦めムードに包まれる。ベテラン教師によく見かける。

##### ③「知識・理解偏重型授業」

「奈良の大仏を造ったのは誰でしょうか。」というようなクイズ的な質問をし、先行学習をしている児童のみが得意気に答える授業のことである。

限られた子どもしか発言せず、いつも一問一答式となり、子どもは「正解かどうか。」で躊躇してしまう。

知識豊富な子ども中心の授業となり、無味乾燥な授業になりがちである。危険なのは、これが「楽しい授業」であるかのように、教師も子どもも錯覚してしまうことである。

##### ④「一方通行講義型授業」

教師の一方的な講義、説明に終始し、子どもの反応は「はい、分かりました。」が繰り返される。「あれ?」「どうして?」と子どもが疑問に思う場面がない。考えるまでもなく「分かりました。」となる授業である。

誰にとっても「そうだなあ。」と思うような情

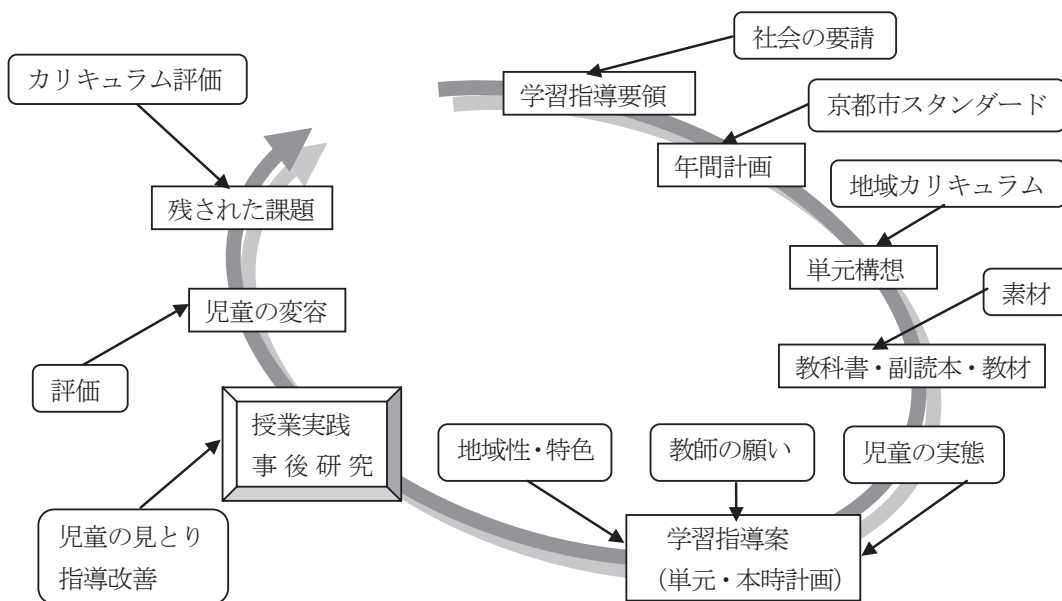


図1 授業づくりのサイクル

報しか提示しないことに原因がある。高学年によく見かけ、学級崩壊を招く要因となる。

①から④のような教師主導型授業は、残念ながら他教科でも見られる傾向にはあるが、社会科の授業において顕著であると言わざるを得ない。その要因には、「社会科」の授業が、知識理解偏重式で、詰め込み式の暗記教科として教員に染み込んでいると推測される。

そして、もう一つ特筆すべきことは京都市全体的に見て、校内研究教科を社会科にしている学校が少ないという現状がある。教員のキャリア実態としても、今まで研究教科に「社会科」を経験している教員が少なく、どのような社会科授業が理想であり、どのように社会科の授業をデザインし教材研究していけばよいか、皆目見当がつかないまま今日に至っているという実態があげられる。

### Ⅲ 社会科授業のデザイン

#### 1 授業づくりのサイクル

1つの授業は、ただ1つ独立し、成立し、存在しているわけではない。教師の単なる思い付きや興味本位で実践されるわけではない。教育というものが、意図的計画的なものである以上、その本質となる授業には、「児童観」「教材観」「指導観」という大きな「教育観」があり、その成立には図

1のような一連のサイクルが存在する<sup>6)</sup>。

つまり、授業づくりは、一連のサイクルによって、ダイナミックなものと捉えることができる。

#### 2 京都市スタンダードにおける社会科

学習指導要領に示された「内容」を一年間という時間の中でどのように配列するのか、大まかな年間計画を立てることからサイクルがスタートする。年間計画は、京都市においては、「京都市スタンダード」という名のカリキュラムが存在し、京都市内各校でその活用は定着している。

これは、各教科・各領域の研究会の教員が、教科書・副読本を基に作成し、単元の目標・時数・評価項目・指導内容・指導方法に至るまでスタンダードな単元構想を示している。

京都市スタンダードでの社会科の単元の指導計画は、「であう」「つかむ」「調べる」「まとめる」という4つの節に分かれている。そして、その4つの節である単元を貫いている大きな「学習問題」が、社会科学習において最も重要といえる。

#### 3 「学習問題」のデザイン

##### (1) 学習問題とは何か

「学習問題」は、「であう」「つかむ」の段階で設定することにより、その後の「調べる」「まと

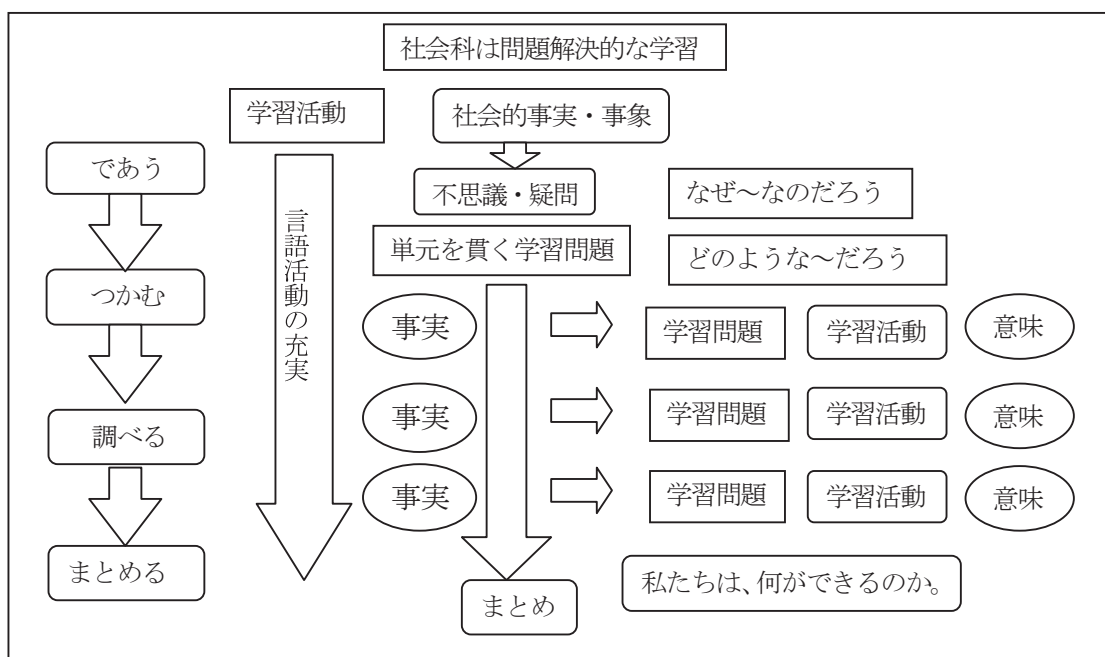


図2 問題解決的な学習としての社会科

める」という追究・解決への必然性となる重要な意味を持つ。「学習問題」は、子どもが「なぜ」「どうして」と思う素朴な「疑問」からスタートする。

子どもの「疑問」をどのように生み出し、引き出すのか。それは、どのように社会的事実・事象と「であう」かにかかっている。

そして、その素朴な「疑問」から「調べて解決してみたい。」という「学習問題（問い）」に練り上げ、焦点化していかなければならない。

この「学習問題」は、単元を貫く大きな「問い」であり、当然「調べる」過程の中で、それに付随する新たな「学習問題」が誕生する。なぜなら1つの「学習問題」で、単元目標・内容を実現、習得できないからである。

## (2) 学習問題と目標との関係

学習問題は、子どもにとってはその学習のめあてとなり、教師にとってはその単元の目標を実現するための指導の道標となる。即ち、学習問題の解決に向けて、児童が学習（追究）を進めると、教師にとっては単元の目標が実現するという関係になる<sup>7)</sup>。

それが、社会科が問題解決的な学習たる所以である。「問題解決的な学習としての社会科」を図式化して表したのが図2である。

## (3) 学習問題の種類

学習問題には、今までの実践事例から次のような型に分類することができる<sup>8)</sup>。

### ①事実追究型

社会科は、まず事実・事象からスタートする学習であり、事実・事象を丹念に追究していく学習活動といえる。子どもにとって事実とは、目に見えたことであり、耳に聞こえたことであり、手や舌に触れて感じたことである。つまり、全ての子どもが納得することである。事実追究型の学習問題は社会科学習の基礎基本といえる。

・どのように（な）～だろうか。

→「駅前付近には、どのようなお店が多いのだろうか。」というように、事実を調べる活動に向かう文型となる。

### ②論理的追究型

社会科学習においては、事実を把握することだけに留まってはならない。事実の裏に隠されていること、事実のもっている社会的な意味や役割、働き、特色などを考えさせるようにすることが大切である。「見えたこと」から「見えないもの」を追究させる学習でなければならない。論理的追究型は、事実追究型の発展型といえる。

・なぜ（どうして）～（している）のだろうか。

→「どうして、駅前付近には、〇〇のようなお店が多いのだろうか。」というように、子どもに社会的思考力を育てる上で、有効な型といえる。

### ③課題判断型

社会的事実・事象の意味を十分踏まえた上で、その意義や課題を子どもなりに考え判断する学習（活動）に向かうことが、社会科学習の面白さを実感することとなる。そこには、友達との対話があり協働がある。

・どちらが（何が）～だろう。

→「新聞とインターネットでは、どちらが私たちの生活に役立つのだろうか。」というように学習問題は、子どもの思考や教材の特性を十分吟味して工夫して設定しなければならない。

### ④意思決定型

未来の社会や地域と自分たちとの関わりを見据えて、課題の解決策を子どもなりに考え、意思決定に向かうことが、これからの社会科学習にとって重要である。つまり、「公共的な考え」に向かうことが、社会科学習の本質といえる。

・どうすれば～だろう。

→「発展途上国の人々に自立をうながすためには、どのような援助をしていけばよいのだろうか。」というように学習問題は、単元の最終段階で、総合的に考える場面で提示される。既習の学習から得た多くの情報を吟味検証して、子どもなりの考えや生き方を決定し表現することに主眼があり、その善悪は問題にしない。

## (4) 学習問題づくりの方法

学習問題づくりの方法についても、今までの実践事例から以下にまとめてみた<sup>9)</sup>。

### ①疑問まとめ型

一枚の象徴的な写真や絵（資料）を提示し、そ

こから気付いたことや疑問に思ったことを複数発表させた後、それらの疑問をつなぎ合わせる方法のことである。そこには、子どもの素朴な疑問は生まれる一方、それを教師主導で問題づくりに持っていくことが多い。教師の優れた技術が必要で、難しい作業といえる。

②対比型

矛盾する優れた資料を「対比」「比較」することによって、子どもは興味を持って分かり易く問題づくりをすることが出来る。「人口が増えている（A）のに、どうしてゴミの量（B）が減っているのか。」というように、AとBを「比較」することによって、Bの特色や意味に着目させることが重要である。その複数の資料の提示の仕方にも、学習問題づくりを左右する。

③ビフォー・アフター型

「朝、登校時には近所のゴミがいっぱいおいてあった（A）。しかし、時間が経過するとゴミはなくなっていた（B）。どうしてかな。」→「AからBの間には、どんなことが起こったのかな。」→「知ってるよ。ゴミ収集車が集めにくるから。」→「どうやって集めに来るのかな。」「どれだけの範囲を回ってくるのかな。」「ゴミは、最終どこへ運ばれていくのかな。」というように新たな疑問が生まれてくる。又、何年経過しても（A）から（B）

へ変化しない場合もある。「何故、変わらないのだろうか。」という学習問題が出来る。

このように、「ビフォー・アフター型」には、「事実」が変化する場合とその「事実」を成立させるための「背景」なり「意味」なりが変化する場合がある。大変問題を捉えやすく有効な方法といえる。

④資料・予想セット型

まず、最初に全体像が分かる資料を提示し、その後の発問によって、児童から予想を持たせながら学習問題をつくっていく。例えば、6年の歴史学習の「戦国の世から江戸の世へ」の単元において、「長篠の戦い」の屏風絵を提示し、気付いたことを発表しながら、「どちらが勝ったのだろう。」という発問から、「鉄砲隊のある方が勝ったと思う。」という予想を立てながら、「鉄砲をどのように手に入れたのか。」「鉄砲によって、戦国時代の戦いはどのように変化したのだろうか。」という学習問題が出来る。

さらに、「江戸図屏風」を見せて、戦国の世から賑わう江戸の世（街）の様子の変り変わりを知り、「戦国時代は、どのように統一されていったのだろうか。」という学習問題が出来る。資料は、時代相を映し出す効果的な資料が求められる。

⑤対立型

「AかBか、あなたはどちらだと思いますか。」

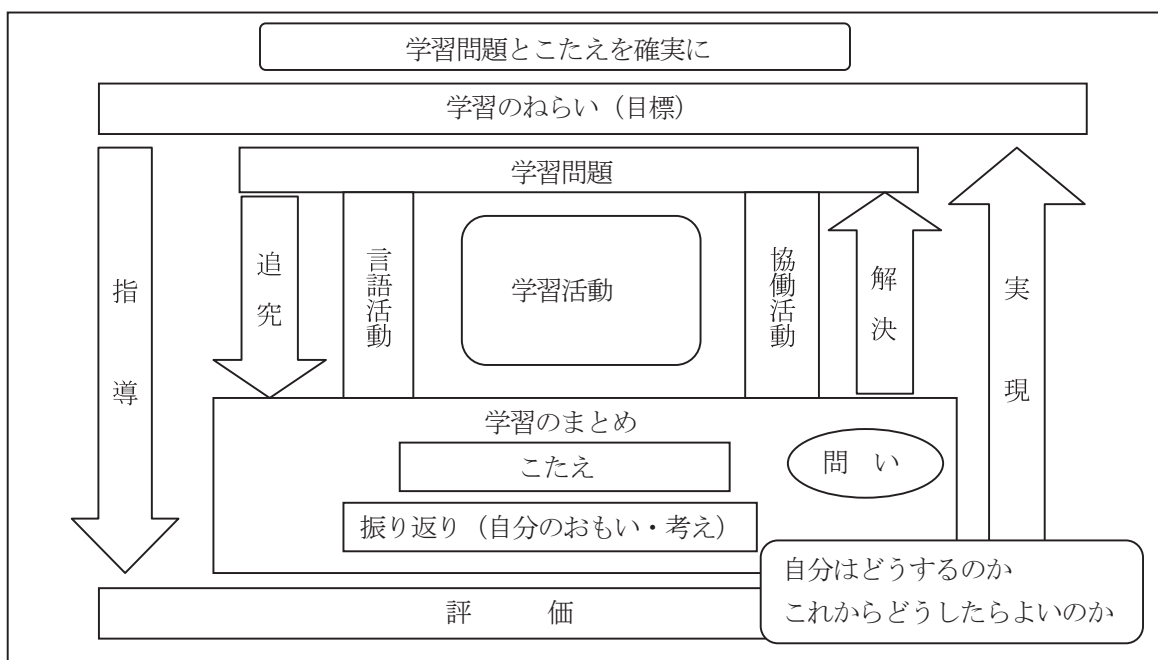


図3 学習問題とこたえ（解決）の関係

という相反する資料を提示し、「学習のまとめ」として、総合的に考えさせる時の学習問題である。自分の立場を明確にし、今までの根拠（情報）を基に考えを相手に伝えることが出来る。

そこには、子どもが社会的事象の意味や意義をしっかりと理解していることと、子どもにさらなる社会的事象への関心を高めたいという教師の願いが必要である。単に討論するためやディベートのための対立であってはならない。学び合いができる学級では、効果的である。

#### (5) 学習問題とこたえ（解決）

実際の指導案作成において、本時の学習問題のこたえ（解決）が出口であり、授業の最後に子どもに言わせたい書かせたい言葉を明確に具体的に示しておくことが大切である。出口を明確にしてから、入口である「学習問題」を作っていくプロセスが指導案作成のコツであり一つの技といえる。

図3「学習問題とこたえ（解決）の関係」のように、出口から入口へのプロセス（学習活動）に、子ども達が主体的に協働的に「調べる」「考える」という活動が位置付けられる。そこに、素材・教材から教材化するという作業と子ども達のおもいや考えの根拠となる資料化という作業が存在する。

子ども達が主体的に協働的に「調べる」「考える」という作業には、言語活動の充実が問われ、学校図書館教育やICT活用が必須となるであろう。

とりわけ、タブレット端末の活用は、集めた情報を貼り付けたり図や文字を書き加えたりすることが可能であり、情報を比較・関連することに有効である。今後は、タブレット端末の活用なくして、主体的で協働的な学びは実現しないのではないかと感じている。

#### 4 教材化のデザイン

いわゆる「教材」とは、教科書（地図帳）・副読本・資料集の他に模型や年表等のことである。地域にある文化遺産やまちの開発の出来事、地域人材の話や働く様子等は、「素材」という言い方が適している。

つまり、「教材」「素材」は、「学習者である子どもと学習内容とを結びつけるための材料」と言える。そして、それらの「教材」「素材」を組織化して、子どもの学習を成立させるための教師の準備を「教材化」と捉えている。教材化のデザインとして、次の3点があげられる。

#### (1) 学習内容の明確化

まず、学習指導要領に示されている目標や内容を踏まえて、授業のねらいや実際に子どもが学ぶ学習内容を選定することが必要である。この学習内容をもとに「教材化」を進めていく<sup>10)</sup>。

例えば、第5学年の内容（4）「我が国の情報産業や情報化した社会の様子」の学習において、内容（4）は、図4のように2つの調べる対象「（ア、イ）」によって構成されている。

実際の授業をデザインする場合、図の上段を授業のねらい、下段を学習内容と考えがちであるが、学習内容の中心は、上段にある。

つまり、学習内容は、「情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていること」や「情報の有効な活用が大切である」であり、その学習内容について考えて理解するため事実が、アとイである。そして、それらの事実をつかむための社会的事象が教材となる。

例えば、アの事実をつかむための教材が「テレビ局が放送しているニュース」、イの事実をつか

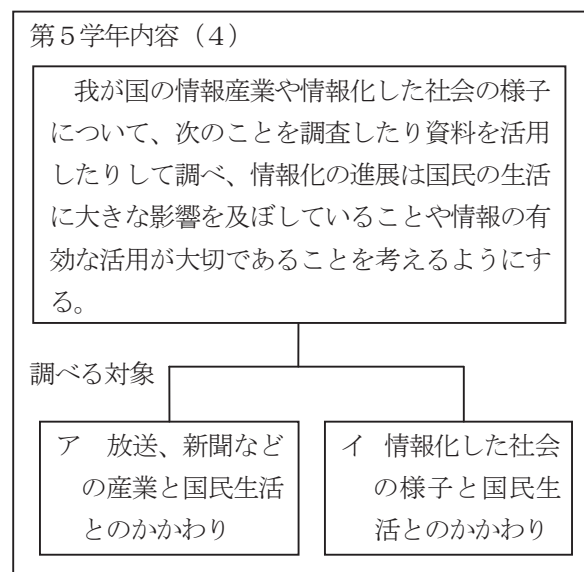


図4 学習内容と調べる対象

むための教材が「病院間（内）の情報ネットワークの取組」などとなる。

この点を明確にすれば、「テレビ局が放送するニュースが国民生活に大きな影響を与えていること」「病院間（内）の情報ネットワークは、情報を有効に活用していること」などと、学習内容が明確となる。

## (2) 教材化の視点

二点目に、社会的事象を子どもに見えるようにすることである。「病院間（内）の情報ネットワークの取組」といってもまだ抽象的であり、子どもに見える事象ではない。

そこで、「A病院とB診療所をつなぐ遠隔医療の仕組み」「A病院の〇〇医師とB診療所の〇〇医師が協力して成し遂げた治療」等の具体的な事実が必要となる。

社会科において、この具体的事実の多くは、人の働きである。仕組みも人の働きが相互に結び付いたものである。人の働きは、教科書等で紹介されているが、授業のねらいを効果的に実現するためには、教師自身が教材化の視点をもつことが大切になる。「どのような働きが、情報を有効に活用していること」になるのかという教材の価値を見極めるのである。

例えば、「遠隔医療の仕組み」を「離れた場所

で双方向のやりとりをして、画像等で患者の情報を正確に共有し合い、力を合わせて患者の健康や命を守る働き」と捉えれば、「離れた場所」「正確に」「双方向で協力して」といった視点を導き出すことが出来る。

これが「情報を有効に活用する姿」を見せる視点である。この視点を子どもが実感できるように「遠隔医療の仕組み」を資料化することになる。

学習指導要領に示されている内容は、「工夫や努力」「働きや苦心」「重要な役割」「安定と向上」など、人の働きを表す多くの文言がある。これらの文言を具体化して、どのような視点で子どもに社会的事象を見せるよう意図するかが教材化の大事なポイントである<sup>11)</sup>。

## (3) 社会的事象の様子や働きの資料化

三点目に、子ども自身が、その教材化の視点で社会的事象を把握し、意味を解釈出来るようにすることが必要になる。教材は、「学習者である子どもと学習内容とを結びつけるための材料」だからである。人の働きの様子や意味を資料化する作業である。

例えば、先の例では、情報ネットワークの仕組みや働く人々の様子の他に、小さな診療所が救えた患者数の増加、離島の地理的位置などを資料化し、時間的・空間的にとらえることが出来るよう

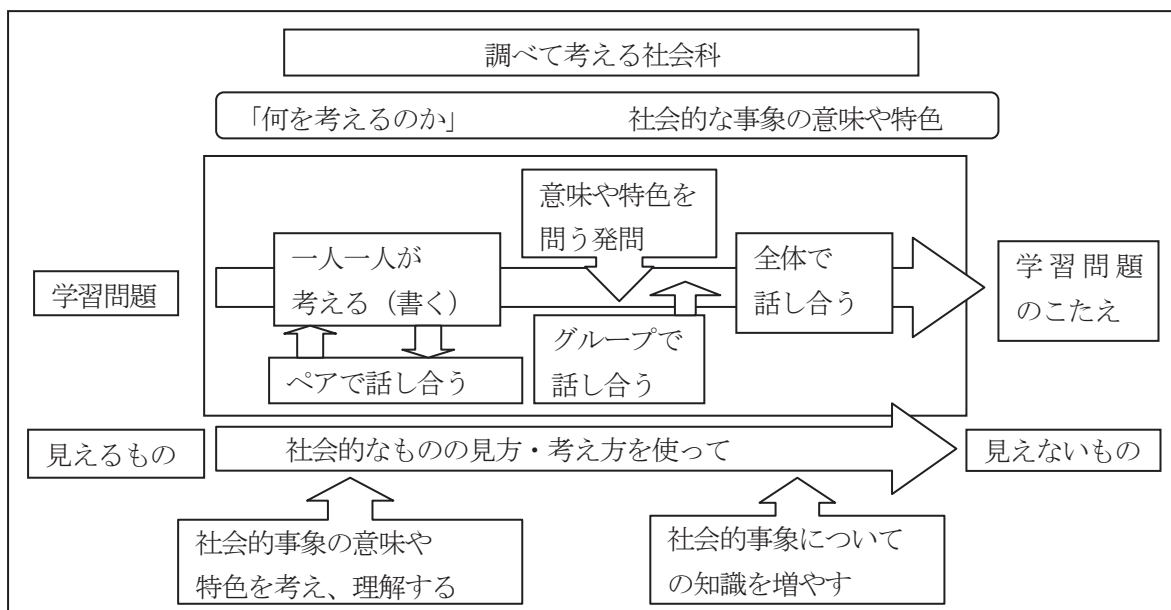


図5 調べて考える社会科



にすることで、「協力して」「離れた場所で」という働きの大きさを考えるようになる。

教材化は、教師の創意工夫が生かされる作業であり、その創意工夫次第で子どもの学習意欲が見違えるように高まる。

## 5 資料化のデザイン

「社会科は、資料が命」と言われることが多い。教材化する作業において、資料化については先述したが、さらに資料化する際の留意点を次に示す<sup>12)</sup>。

### (1) 実物、本物に出会うことの大切さ

子どもの興味関心が高まる資料として、本物や実物に勝るものはない。又、実感的に理解し、共感するといった効果も大きい。その場合、事前の調査と子どもたちに何を調べさせるのかを明確にしておくことが大切である。答合わせ的に活用するだけでは、一面的で情緒的な理解に留まる。

### (2) 統計等のデータ資料の活用

人々の働きや営みを客観的に捉えるためには、数値等の資料化が不可欠。「工夫や努力」の成果が現実データに裏付けられると何より説得力がある。社会科が実証的な追究の教科である以上、この資料化は極めて重要である。

### (3) 人々の活動の様子

観察・調査、体験等を通して人々の実際の活動の様子を資料化する。子どもが諸感覚を通して、自らの情報を獲得し、推論し、学習問題のこたえに迫る方法である。社会のつながりや仕組みが見え、実感的な理解も促す。

## Ⅳ おわりに

最終的には、図5の「調べて考える社会科」（問題解決的な学習）を目指し、「授業観察」「授業公開」「授業分析」というサイクルを何度も繰り返すことによって、社会科の授業デザインの質は上がるであろう。

単元の出口にある「子ども達に付けたい力は何か」「学習問題のこたえ（見えないもの）は何か」を明確にすることからスタートし、単元の入口で

ある「学習問題」を設定し、教材化・資料化という社会科の授業デザインづくりについて具体的に述べてきた。

「社会科が好きだ。」という子どもに一人でも多くするためには、教師自らが「社会科好き」にならなければならない。そのためには、教師が実践を通して子ども達の変容を実感することが一番である。何度も試行錯誤しながら学校組織全体として実践を積み上げることが大切であると考えられる。

冒頭の「アクティブ・ラーニング」という「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」を確立するための道は、なかなか険しい道ではあるが、「調べて考える社会科」の授業を通して、これからも取り組んでいきたい。

## 【註】

- 1) 文部科学省・初等中等局教育課程課（平成26年11月20日）『初等中等教育における教育課題の基準の在り方について（諮問）』
- 2) 前掲
- 3) 澤井洋介（2015年7月29日）『これからの社会科の授業づくりの具体策』京都市総合教育センターにおいて、「社会科指導講座」での講演のレジュメ
- 4) 前掲
- 5) 澤井洋介（2015年）『社会科の授業デザイン』東洋館出版社、80～84頁
- 6) 久野弘幸（2006年）『学力が身に付く授業の「技」4「授業をデザインする技」』ぎょうせい、7頁
- 7) 澤井洋介（2015年）『社会科の授業デザイン』東洋館出版社、104～108頁
- 8) 北俊夫（2004年）『社会科学習問題づくりのアイデア』明治図書、49～56頁
- 9) 澤井洋介（2015年）『社会科の授業づくりトレーニングBOOK』明治図書、14～23頁  
澤井洋介著（2015年）『社会科の授業デザイン』東洋館出版社、117～131頁
- 10) 澤井洋介（2015年）『社会科の授業づくりトレーニングBOOK』明治図書、71～72頁
- 11) 澤井洋介著（2015年）『社会科の授業づくりトレーニングBOOK』明治図書、72～74頁  
澤井洋介著（2015年）『社会科の授業デザイン』東洋館出版社、131～148頁
- 12) 澤井洋介著（2015年）『社会科の授業デザイン』東洋館出版社、145～150頁  
澤井洋介著（2015年）『社会科の授業づくりトレーニングBOOK』明治図書、74～75頁

【参考文献】

- 奈須正裕（2008年）『学力が身に付く授業の技1・「教師という仕事と授業技術」』ぎょうせい
- 守屋 淳（2006年）『学力が身に付く授業の技2・「子どもとともに育つ技」』ぎょうせい
- 久野弘幸（2006年）『学力が身に付く授業の技4「授業をデザインする技」』ぎょうせい
- 北 俊夫（2009年）『授業のヒント60』文溪堂
- 安野 功（2005年）『社会科授業が対話型になっていますか』明治図書